KITA NO MACHI NO NEWS LETTER

キタのまちのニュースレター

No.15 2024 冬-春号

造幣局前・大川を行く〝現場紀行〟。その、幕末スグの創業式は明治4年4月4日。当時は大川が大動脈、だから今も建物正面はこっち向き！

浪花百景タペストリー展 & 現場紀行

北区民センター・大淀コミュニティセンターでは、歴史と文化に触れる「浪花百景タペストリー展」に取り組んでいます。今号では、そこから発展した今年初の試み〝現場紀行〟についてご案内します。

北区の風景・大阪の表情

いつもの散歩コースのルートからそれて歩いてみるとそれがそのまま街歩きの感覚になり、思いがけない景色に出会うことが珍しくありません。

それは、ハッとした角度から差し込んできた朝日や夕日、新規開店準備のさらっぴん。その逆……無くなってしまった個人店。また、出来たてほやほやのマンション、意外な場所の名所旧跡、長屋の小道のインバウンド旅客、等々……多種多様です。

この街歩きの感覚に、さらに探求心というスパイスを効かせると、「小さな旅」へと育ちます。その効果的なスパイスのひとつに「文化と歴史が積層された風景」があります。ただし、先の大戦で戦火にまみえた大阪は、一面一体ことごとくが爆撃され焼け野原となり、また、歴史的に地震や風水害の天変地異にさらされることも多かったので、よっぽど注視しないと記憶されてきた風景には出会えません。

例えば、現在の大阪城天守閣は、大阪市民らの浄財により昭和6（1931）年に〝新築〟された今年「満94歳」の〝風景〟ですが、もっともっと古くから、文化と歴史が積層する「だれもが認めるニッポンの風景・大阪の代表格」です。

その中でも、天満橋上流すぐの北区側から、大川にかかる人道橋・川崎橋を歩けば、大川の風景と大阪城の遠望が素晴らしく「大阪の表情」が輝いて見えます。その輝きは、悠久の歴史につながり、〝あの人・この人〟とも出会えます。そんなことと遭遇し、今この時を共有するのが現場紀行です。

浪花百景「現場紀行」

「大阪は歴史に疎く、文化的な表情に欠ける」と喧伝され、自らそれを甘んじて受け入れる土壌もありますが、街歩きで景色に出会い「小さな旅」を育てれば、自分なりの「大阪の表情」が発見できます。

この「小さな旅」への誘いは、4年前に出会った江戸期幕末の錦絵コレクション、浪花百景がきっかけで、大阪大学総合学術博物館の先生方との出会いから始まりました。

浪花百景は「写真が無い時代、大坂の観光案内図絵」みたいな役割もあり、その時代の「風景・生活・文化」の記録でもあります。この興味に対し、先生方は格別の指導をしてくださいました。その記憶と記録は、本紙4ページで「浪花百景歳時記」として毎回オリジナルの文を起こし、連載していただいています。

さらに、この原画データを高精細で復元、耐候性のある生地に16倍もの大きさで引き伸ばし「浪花百景タペストリー」とし、指に触れ手触りしてもビクともしない『浪花百景タペストリー展』として楽しんでいただき、さらにこの際には、とても親しみやすいワークショップも同時開催しています。「文化と歴史が積層された風景」……それらを学ぶことのできる無料のティーチングプランです。

浪花百景タペストリー展とワークショップは毎年一度、今年は11月の開催で第5回目の区切りを迎えます。そこで、昨年の第4回目の開催ではタペストリー展で学び、街に飛び出し現場紀行に挑戦してみることになりました。特別に小型船をチャーターし浪花百景で描かれている〝現場〟を旅するプランです。

北区の大川・中之島周辺は現場紀行にうってつけです。なぜなら、浪花百景に描かれているポイントが多いのです。「その時、歴史が動いた」現場も数多く魅力は尽きません。

ワークショップの様子

《2ページ左欄に続く》

《1ページから続く》

現場紀行では、街をブラブラする〝名番組〟に何度も協力されている大阪大学総合学術博物館・副館長 船越幹央先生に指南役をお願いしました。参加者一同、その名調子に時が過ぎるのも忘れ、大満足の様子でした。

現場紀行は未来の入り口

旅と観光は似て非なるものがあります。「旅業」なる言葉は存在しませんが「観光業」という言葉は立派に存在します。観光産業はありますが、もちろん旅産業なる表現は聞いたことがありません。

ところが、情報テクノロジーの進化は、交通手段や宿泊予約を劇的にセルフ化させ、それに伴い、観光を限りなく個人ベースの楽しみに仕立て直しました。皮肉なことですが、この進化で、「小さな旅」が見直され、この包容力に満ちた街をつくることが、底堅く安定的な観光産業のキーになっています。

パリと大阪を比較するつもりはありませんが、そう遠くない昔、北区中之島をパリのシテ島になぞらえ、もう少し大きな話では〝大阪は花の都である〟と賞賛されていたことを、いくつかの出版物で何度も見た記憶があります。そして今、パリの「小さな旅」はとても活発ですが、大阪の「小さな旅」は大したことがありません。

先生方も私たちも観光業者ではなく、現場紀行は街歩きの延長線上の「小さな旅」に過ぎません。……船上から見た大阪の水辺では新しいビルが何本も建ち、その中には新しいホテルもいくつかありました。それらは、海外資本のネットワークが多く観光産業の先進国は「小さな旅の効用を経験済み」……狙ってるなと感心しました。

浪花百景には、大阪に繁栄をもたらした大きな存在「全国諸藩の蔵屋敷」が描かれていることが多く、この川筋が“その現場”でした。戦後は、ビジネス街としてサラリーマンやOLらの独占地みたいなところがありましたが、もはや「サラリーマン・OL」という言葉そのものが流通していません。

未来に通じる「観光産業の種」が北区にゴロゴロ？　そんなことを感じる現場紀行となりました。

左に川崎橋。向こうに大阪城。その右スグ、新しい外資系ホテル。

大淀＆北区民センター便り

大淀コミセンで語り継がれていること

それはこんな内容です。

「この会館の1階ホールは、ひょっとしたら大阪で一番使いやすいホールではないか？」という話です。その理由は、上下2枚の「この写真」に込められています。

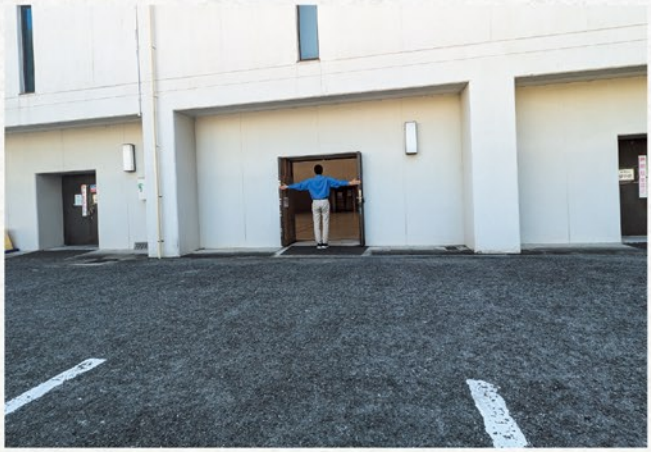
上の写真はホール内側から見た「外に通じる物品搬入用」の両開き扉。下の写真は、その扉を外側から撮った写真で、手前の白線は扉スグに位置する駐車場のモノです。（ホール利用の主催者に無料貸し出し可。詳細はお問合せください。）ちなみに、このスタッフの身長は175㎝です。

……そうなんです……少し大げさな表現になりますが、大淀コミセンの1階ホールは「駐車場と地続き」なので、大道具・小道具を必要とする主催者には、とても強い味方。「この会館の1階ホールは、ひょっとしたら大阪で一番使いやすいホールではないか」と語り継がれています。

さらに、舞台袖から（演者などの控室にピッタリの）和室への動線に独立性があり、裏方さんが少なくても、舞台と客席の仕切りが容易で「当日運営が少人数でもなんとかなる」と、人気です。

大淀コミセンは開館から40年余が経過し、新しい施設ではありませんが、その分、昭和レトロの味わいが感じられ、「なんとなくホッとする」……こんなことも人気の理由なのかもしれません。

詳しくは、「大淀コミュニティセンター」を検索の上ご確認ください。もちろん見学・利用の相談も可能です。



キタ歩き日本旅

秋田県の巻

全国約半数の道府県事務所が北区「大阪駅前ビル」に！ 旅の玄関口みたい！！ それが〝キタ歩き日本旅〟です。

秋田県横手市の「かまくら」（写真提供：秋田県大阪事務所）

———秋田県大阪事務所にチームリーダの鎌田さんを訪ね、こう切り出しました。ずいぶん昔の話で恐縮ですが《たこやき（1998 年・講談社刊）》という名著があり、大阪のコナモノ文化を全国区に広め、その後、横手のやきそばなんかの普及にも尽力、大阪との交流を進めた女史がいます。

そのご縁か？秋田県横手市と大阪市の交流は深く、天神橋 2 丁目商店街では「まるっと観光物産展」を、大阪城 太陽の広場公園では「横手の雪まつり」を開催してきました。さらに今年は、大阪・関西万博で、姫路市とともに『水に感じる日本の神性（しんせい）さ』をテーマに共同ブースをつくり上げ、『かまくら』を披露させていただく予定です。

———万博で『かまくら』とは知りませんでした。秋田の方の県民性ってどんな感じですか？

大阪もそうでしょうが、秋田の魅力もホスピタリティ豊かな人がまずイメージできます。ビックリするような伝統ですが、明治 29 年（1896）秋、秋田県人同志が必要性を感じ県人会組織を創立、以来 130 年ほどの歴史があります。その名を近畿秋田県人会と言います。

———近畿の「畿」は「都」の意味、「近畿」は都に近いという歴史的な意味合いです。その点で近畿秋田県人会の名に貫禄を感じます。

貫禄と言うほどではありませんが県人会の会員数はまだまだ多く、この県事務所も県人会の皆様といっしょになって大阪で頑張っています。私は7年目の大阪務めですが、秋田人の気風は、大阪人と相通じるようなところがあると感じています。ぜひ、県人会の皆さんも取材してください！

———大阪人のゆるさが一緒になれば、秋田であり横手の『かまくら』が唯一無二のホスピタリティを発揮できるかもしれません。

本当にそう願っています。伝統といえば……秋田県大阪事務所の歴史も古く「連絡事務所」は当時の北区絹笠町 50 に開設しています。先の東京オリンピックのすぐあと昭和 40 年（1965）です。

———かつて堂島川と曽根崎川（蜆川）が合流していた「堂島」の東端、大江橋北詰の堂島ビルヂング内ですね。

この駅前第 1 ビルには開業年すぐ、先の大阪万博と同じ昭和 45 年（1970）の入居です。そんなこともあり、大阪の空気感は私たちと一体です。この事務所のフロアとは別室になりますが、同じ階に県人会事務所の皆さんもおられます。ぜひ取材し、万博の『かまくら』も体験しにみえてください。

———ということで、後日、県人会の皆様を取材させていただくことになりました。

「なまはげ」とともに！左から近畿秋田県人会の須藤さん、佐藤さん。県事務所の鎌田さん。

北東北三県大阪合同事務所　☎06-6341-7900 ／ 秋田県大阪事務所　直通☎06-6341-7897
北区梅田1-3-1-900 大阪駅前第1ビル9階　（開所 平日9時～ 17時45分／土日祝・年末年始は休み）

浪花百景歳時記

酔っ払い連中の着物をよく見ると……

大阪大学総合学術博物館
研究支援推進員
波瀬山祥子

第四景　「さくらの宮景」　歌川国員画

登場人物が絶好調!! の作品がこれ。そろいの浴衣にそろいの手ぬぐい。花の輪郭に「王」の字は「桜花」とも読めます。丁髷のお兄さんがバンドリーダーでしょうか。チョップ奏法が決まったエレキギター みたいにビビビ ビビ〜ン と三味線が響きます。左右対称の構図と人物に比して建物（屋形船）が大きいのは国員の特徴です。

道行ナビゲーター　大阪大学名誉教授　橋爪節也

桜の名所である桜宮神社周辺を、大川右岸（現・北区側）の船中から捉えます。川向こうにお宮の鳥居が見え、土手に満開の桜、川沿いに花見の小屋が並び、屋形船でも大勢の人が花見を楽しんでいます。夕方に近いのか背後の生駒山の稜線にそった空は金色に染まっています。船で三味線を弾く男の目は据わり、女の目元は赤らみ、ご馳走も平らげて宴もたけなわの様子です。提灯の短冊は風に揺れ、心地よい春風が吹いています。前々号で紹介した「三大橋」の大砲を運ぶ物々しい行列からは一転して、春を謳歌する享楽的な庶民の暮らしぶりが見て取れます。ここを舞台とする落語「百年目」は、普段堅物な番頭が、派手な格好をして船で桜宮の花見をしていたところを、店の旦那に見つかって青ざめるという話です。

環状線の駅名としても馴染み深い桜宮神社は、元々旧大和川堤の桜野というところにありましたが、水害などで何度か遷座し、現在の都島区中野町に鎮座したのは宝暦六年（一七五六）のことでした。旧地の名にちなみ境内のほとりに数百株の桜を植えたところ、その名の通り「桜宮」となったと伝わります。『淀川両岸一覧』（一八六一年刊）には、「水辺より馬場の堤に至るまで一円の桜にして、晩春の花の盛には雲と見、雪と疑ふ風景なり」と圧巻の様子を伝えています。また付近は、茶の湯に適した良水が採れる場所として知られ、文人画家の田能村直入がそれを顕彰し建てた「青湾の碑」が現存します。江戸時代、桜宮付近の淀川の水は貴重な飲料水として市民の生活を支え、近代には、安定した水を供給するため桜宮水源地が設けられました。

絵に話を戻しましょう。この図は毎年恒例となった「浪花百景タペストリー展」で観覧者から人気が高く、見どころはなんと言っても船中で繰り広げられる飲めや歌えやの饗宴シーンです。左下には三味線のほかに横笛を吹く男の姿も描かれています。ここで注目されるのが、桜に「王」と書かれた三人の着物です。これは、歌舞伎役者の贔屓連中「花王連」の紋と近しいという指摘があります。

花王連は格式高い観劇集団の一つで、歌舞伎の顔見世狂言で「手打ち」という最も重要な儀礼を執り行い、揃いの衣装を着て熱狂的に推しの役者を支援しました。ここでは花王連がオフ会を催し、歌舞伎のお囃子を自前で演奏して盛り上がっているのかもしれません。

編集後記

大淀コミセンへの交通便は大阪メトロ「天六駅」からが一般的ですが、広域からは大阪駅前発のバス便で「天八バス停」下車がとても便利。バス本数が（早朝から夜遅くまで）とても多く乗車時間も10分足らず。ホントに意外なほど便利です。また「天八バス停」から大淀コミセンまでは歩・2分ほど。大淀コミセンまでお気軽にお問い合わせください。

■編集・発行：北区民センター・大淀コミュニティセンター・都市コミュニティ研究室
■指定管理者：一般財団法人大阪市コミュニティ協会
■発　行　月：7月・10月・1月・4月の各月下旬発行

北区民センター　〒530-8401 大阪市北区扇町2-1-27
✉ kitakumin-center@abelia.ocn.ne.jp
大淀コミュニティセンター　〒531-0074 大阪市北区本庄東3-8-2
✉ oyodo-comini@abelia.ocn.ne.jp